

令和5年度

新時代に対応した高等学校改革推進事業
(普通科改革支援事業)

研究実施報告書



北九州市立高等学校
北九州市教育委員会

目 次

はじめに

1 背景と目的

- (1) 北九州市立高等学校の現状と課題 1
- (2) 国の普通科改革を踏まえた学科再編への動き 1
- (3) 新学科の目標・目的 2

2 令和5年度事業の取組

(1) 「せっかくやるのなら・・・」 — 学校と教職員の意識の変化

- ア 「新しい学び（カリキュラム）を創る」＜「新しい学校を創る」 4
 - (ア) 新たなことに果敢にチャレンジする「事業企画室」を校務分掌に新設 5
 - (イ) 様々なチャネルを活用したPR活動
 - (ウ) これまでにない学校案内（パンフレット）にチャレンジ 6
 - (エ) 新しい学校をコンセプトに、新たなロゴづくりにチャレンジ 9
 - (オ) 教職員ポロシャツづくりにチャレンジ 10
 - (カ) 生徒による体育祭Tシャツづくりにチャレンジ
 - (キ) プロモーションビデオ「学校の色を決めるのはキミだ！」製作にチャレンジ 12
 - (ク) 保護者向けの説明会「歓迎！ナイトスクール」開催にチャレンジ 13

(2) 外部と一緒に考える・取り組む

- ア 文科省事業における実施体制（教育委員会・本校） 16
- イ コーディネーターの配置及び活用内容 17
- ウ 市高魅力化コンソーシアム 18
- エ 北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会 19

(3) 様々な分野の方々との出会いがあふれる学校へ

- ア 学校内外での大学生との活動 20
- イ 大学生インターンシップの受入れ 21
- ウ 大学との連携
 - (ア) 九州工業大学と連携したアントレプレナーシップ教育 22
 - (イ) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学及び西日本工業大学との連携協定締結 23
- エ 他校の生徒との交流 25
- オ 企業等との連携
 - (ア) 日本IBM株式会社との取組 26
 - (イ) 福岡県中小企業家同友会との取組 27

(4) 「高校魅力化評価システム」から見てきた変化

- ア 生徒編 28
- イ 教職員編

（５）学校の教育理念の柱をつくる	
ア スクール・ミッション	30
イ スクール・ポリシー	31
（６）高校入試改革	
ア インターネット出願方式の導入	33
イ コミュニケーション力を重視した選抜制度の検討・導入	34
ウ 志願倍率の変化	36
エ 合格内定者・合格者を集めた「ファーストコンタクト」を実施	
（７）令和６年度からのカリキュラム案	
ア 「カリキュラム検討委員会」	
（ア）カリキュラムの試行実施・改善	38
（イ）新たな学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」に係る単位数の再検討	39
（ウ）定期的なカリキュラム検討	
（エ）コーディネーター（ＣＮ）及び外部有識者等との連携強化	40
（オ）学生インターンと協働したカリキュラム検討	
（カ）先進事例の視察とその活用	
（キ）探究的な学びづくりのための教職員の実践	41
（ク）客観的評価に基づくカリキュラム改善	
３ 令和６年度の展望	42
●参考資料●	
参考資料１ 保護者向け説明会「歓迎！ナイトスクール」資料	44
参考資料２ 保護者向け説明会「歓迎！ナイトスクール」保護者アンケート結果	71
参考資料３ 令和５年度 市高魅力化コンソーシアム 議事概要	82
参考資料４ 令和５年度 北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会 議事概要	88
参考資料５ 「インタビューシップ」資料	92
参考資料６ 高校魅力化評価システム（北九州市立高等学校：令和５年度）	114
参考資料７ 「リーダーシップ研修」資料	123

1 背景と目的

(1) 北九州市立高等学校の現状と課題

北九州市立高等学校（以下「本校」という。）は、北九州市内のみならず、福岡県全域から受検可能であるが、近年 15 歳以下の人口が減少していることもあり、過去 5 年間の平均志願倍率は 1.08 倍で、倍率が 0.87 となった年もある。

本校は部活動が大変盛んで、九州大会や全国大会に出場する部活動もあり、常に地域の注目を浴びている。そのため、部活動が主目的の志願者が大半を占めており、部活後・卒業後の展望を持っていない状態の生徒が少なからずいることも課題である。

また、市内唯一の市立高校であることから、人事が固定化しがちである。本校が中学校教員の異動先になっていることは、「中高連携」の一環としてプラスの側面がある一方で、中学校の延長化、「高校が中学校化」しているというマイナスの側面があることも否めない。

教職員は教育に対して非常に熱心であるが、市内の県立高校や高等教育機関などとの交流も少なく、「学校のことは学校の中だけでどうにかしなくてはならない」と、いわゆる「自前」で努力してきた経緯がある。

令和 4 年度に創立 60 周年を迎えたが、厳しい校則・校風が「古きよき伝統」として重んじられている学校でもある。歴史や伝統も大事にしつつも、生徒も教職員も安心して過ごすことができる学校づくり、時代の要請に応じた学びへの変化、探究学習などを通じて「コンピテンシー・ベースの学び」に転換していくことなどが本校の喫緊の課題となっていた。

【志願倍率の状況】

令和元年度	普通科 1.01	情報ビジネス科 0.80
令和2年度	普通科 1.40	情報ビジネス科 1.18
令和3年度	普通科 1.18	情報ビジネス科 1.13
令和4年度	普通科 1.29	情報ビジネス科 0.90
令和5年度	普通科 1.13	情報ビジネス科 1.11

(2) 国の普通科改革を踏まえた学科再編への動き

本市では、産業構造や若年人口減などの社会情勢の変化などを踏まえ、令和元年度に有識者会議「北九州市後期中等教育に関する検討会議」を立ち上げ、北九州市立高等学校及び戸畑高等専修学校の在り方について協議を重ねてきた。

令和 3 年に、北九州市教育委員会では、検討会議での意見などを踏まえ、北九州市立高等学校については存続させるものの、地域の魅力を生かした特色ある教育内容の充実などの改革が急務であり、探究的な学習活動の充実や学科構成を変更（現行の普通科を「地域社会に関する学科」へ）することなどを決定した。

本校は、令和 4 年度に、文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定校となり、後段で詳述する外部有識者会議「市高魅力化コンソーシアム」及び「北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会」を立ち上げ、産・

官・学・民から構成される有識者等と対話しながら、本校の方向性について検討してきた。

変化が激しく、不確実性の高い時代にあって、様々な年齢・分野・立場の方々と対話・連携・協働しながら、共に未来を創造する学科を目指していくことを前面に押し出すことにより、旧来からの教育活動を見直し、授業研究、「指導者から支援者・伴走者へ」、そして生徒が主役の学校づくりにつなげていくことになった。

令和4年度末には、「北九州市立高等学校学則」を改正し、令和6年度入学生から現行の普通科を「地域社会に関する学科」に変更することを決定した。また、現在は普通科2クラス、情報ビジネス科3クラスとなっているが、令和6年度入学生からは情報ビジネス科を1クラス減らして、普通科を1クラス増やすことも決定した。

各設置者は、特色・魅力ある教育内容を表現する名称を学科名とすることができるが、様々な方々と対話・連携・協働しながら、共に未来を創造することを目指す学科であることを体現するため、新たな名称については「未来共創科」と改称することになった。

新学科の進行イメージは令和6年度から1学年ずつ移行していき、令和8年度に未来共創科の生徒が3年生まで揃い、進学実績が初めて出ることになる。

学科構成

	R 4 年度の学科		定員
普通科	1 組	普通科	80人
	2 組	普通科	
専門学科	1 組	情報ビジネス科	120人
	2 組	情報ビジネス科	
	3 組	情報ビジネス科	

	R 6 年度からの学科		定員
普通科	1 組	未来共創科	120人
	2 組	未来共創科	
	3 組	未来共創科	
専門学科	1 組	情報ビジネス科	80人
	2 組	情報ビジネス科	

進行イメージ

R 5 年度			
	1 年生	2 年生	3 年生
1 組	普通科	普通科	普通科
2 組	普通科	普通科	普通科
3 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
4 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

R 6 年度			
	1 年生	2 年生	3 年生
1 組	新学科	普通科	普通科
2 組	新学科	普通科	普通科
3 組	新学科	情ビ科	情ビ科
4 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

R 7 年度			
	1 年生	2 年生	3 年生
1 組	新学科	新学科	普通科
2 組	新学科	新学科	普通科
3 組	新学科	新学科	情ビ科
4 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

R 8 年度			
	1 年生	2 年生	3 年生
1 組	新学科	新学科	新学科
2 組	新学科	新学科	新学科
3 組	新学科	新学科	新学科
4 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科
5 組	情ビ科	情ビ科	情ビ科

初
実
績

(3) 新学科の目標・目的

令和6年度からの新学科「未来共創科」には、これまでの「普通科」で実施してきた教育課程に加えて、北九州市立高等学校独自の設定教科「イチリツ・プロジェクト」（以下「イチプロ」という。）を新設する。必修科目「総合的な探究の時間」（以下「総探」という。）と合わせて、6単位以上を取得できるように設定する。

「イチプロ」では、希望あふれる未来を地域の様々な仲間（産・官・学・民）と共に創る学びを通して、生徒のキャリア形成と進路選択（大学進学等）に生かしていけるものにする。

総探と「イチプロ」の学びの充実を契機として、教科学習においても探究的な活動を取り入れるなど、教科学習との接続、教科横断的な学びについても着実に取り組むことを目指し

ている。

「インプット」(情報・知識を取り込む)→「アウトプット」(活用・運用・表現)→「フィードバック」(評価、振り返り)の3ステップを何度も繰り返すことにより、新しい大学入試にも対応できる力を身に付けるとともに、社会人になっても役立つ「課題発見力」「表現力・説明力」などを育成する。

「未来共創科」では、定期的に学年・学校種を超える学びを取り入れるなど、枠にとられない学びのスタイルや横断型の授業・教育活動を柔軟に組み込んでいく。

令和4年度からは、外部との連携体制の構築等の役割を担うカリキュラム等コーディネーターを配置したり、教育委員会が北九州市立高等学校と市の関係機関とのつなぎ役になったりするなど、外部とスムーズにつながるための新たな体制も構築している。

令和5年度からは、北九州市立大学の大学生が週3回ほどインターンシップ生として教育活動の補助等に携わってくれており、生徒の身近なところによりロールモデルが日常的に居てくれることは、生徒のみならず、教職員にも大変よい刺激となっている。

また、本校は、昭和38年に北九州市立戸畑商業高等学校として発足しており、商業教育を礎とする学校である(平成19年に普通科を新たに設置した際に、北九州市立高等学校に改称した)。情報ビジネス科は、簿記会計能力、経済社会への理解力、事務処理能力、パソコンを使いこなす知識や技術などの修得を目指す学科である。

そのため、未来共創科での教育課程において、情報ビジネス科とのコラボレーションや、情報ビジネス科が従来から有するノウハウ(マーケティング、情報処理など)を存分に活用した教育活動を盛り込み、起業家マインドの育成につなげていきたい。

また、本校では、複数の企業で経営者として長年勤めた経歴を持つ民間人校長(令和4年10月からは副校長として、令和5年4月1日からは校長として配置)を採用している。

令和5年度からは、外部人材ならではの大胆な発想と幅広いネットワークを生かした教育活動(校長と生徒が市高の未来について考えるプログラムなど)に取り組んでおり、「普通教育を主とする学科」としてのカリキュラムに加えて、ビジネスの視点を盛り込んだ学びについても充実させていくことを目指している。

2 令和5年度事業の取組

(1)「せっかくやるのなら・・・」 ― 学校と教職員の意識の変化

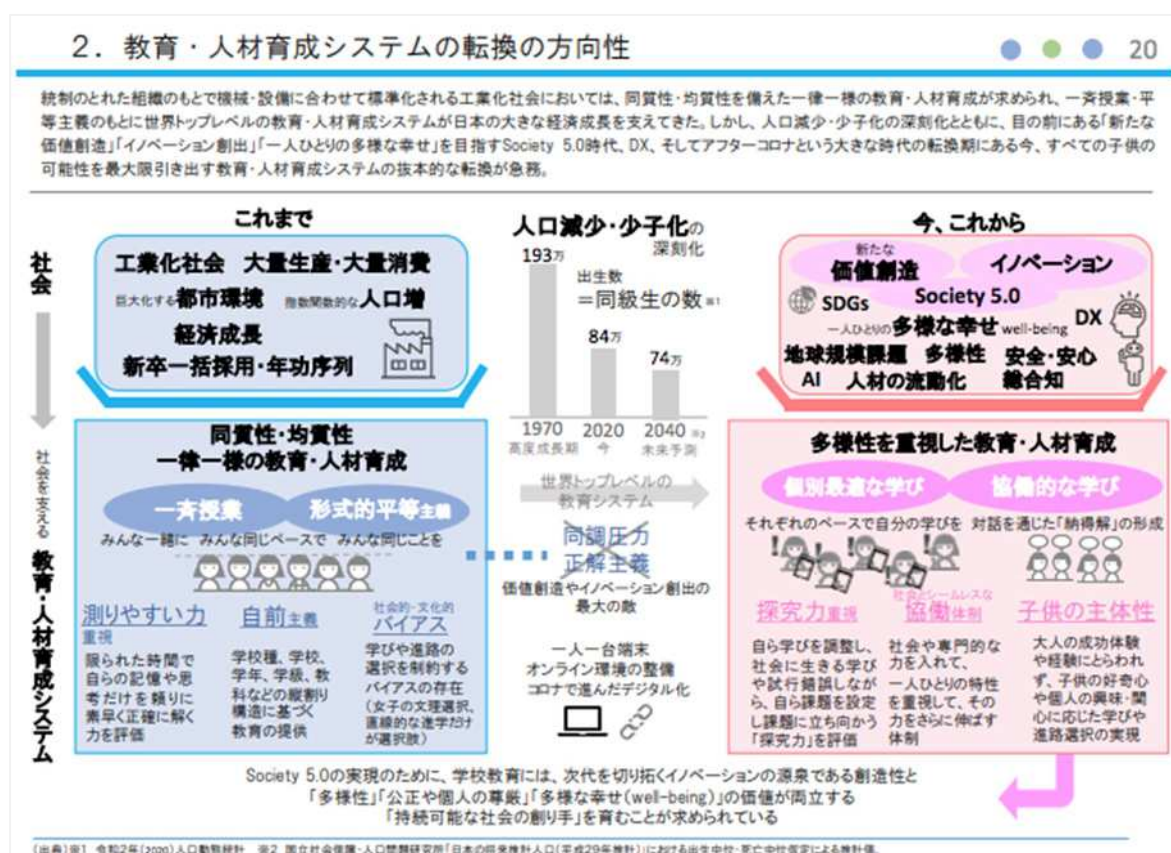
ア 「新しい学び（カリキュラム）を創る」＜「新しい学校を創る」

本校は、北九州市政の発足とともに、「北九州市立戸畑商業高等学校」の名称で設立され、令和4年度に創立60周年を迎えた。

戸畑商業高等学校では、昭和44年度に貿易科、昭和48年度に情報処理科、平成元年度に国際経済科を設置するなど、時代のニーズに合わせた学科再編やカリキュラムづくりを実践してきた経緯がある。

当時のような工業化社会、大量生産・大量消費の時代においては、教育分野においても同質性・均質性が重視されていたことなどから、学校の特色化や魅力化などにまで十分に着手できていなかったように思う。

しかし、「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」にも示されたように、これからの社会では新たな価値創造、イノベーションが必要で、多様性を重視した教育・人材育成、個別最適な学びや協働的な学びを取り入れた教育が求められている。これらを踏まえると、単なるカリキュラムの改編だけでは不十分であり、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を本校の学びの中心軸に据える必要がある。



とはいえ、同質性・均質性を追求する教育を子どもの時分から経験してきて、そのような授業を長年にわたり実施してきた教職員にとっては、「個別最適な学び」や「協働的な学

び」の重要性は頭では理解できても、実際にどのように授業に生かしていけばよいのかなど、困惑することも多いのが実情である。

しかし、A I の飛躍的進化やD X推進等により、我々の生活自体が大きく変化しているにも関わらず、学校現場が多様性を重視した教育・人材育成に向けて少しずつしか変化していけないのであれば、その間に教育を受ける生徒にとっては不利益以外の何ものでもない。

つまり、「大人（教職員）が変われない」ことによって、生徒が社会から取り残されるリスクが高まるようなことが決してないように、教職員こそがしっかりと未来の社会を見据え、その未来の社会に向けて必要な教育を提供して生徒に伴走する必要がある。

そのためには、単にカリキュラムを改編するだけでなく、この学校の文化自体を変革しなければならないと考え、本校では、令和5年度の目標として

- 未来を見据えてシフトしている学校づくり
- 社会に触れる様々な機会
- 新しいことへの果敢なチャレンジ

の3点を据えて、重点的に取り組んでいくことにした。

（ア）新たなことに果敢にチャレンジする「事業企画室」を校務分掌に新設

令和4年度までの校務分掌において、学校の広報業務を担う「広報」としていた部署を、令和5年度からは「事業企画室」という名称に変更した。

従来の「広報」の部署では、学校パンフレットやホームページの作成、中学生・保護者対象の学校見学会の実施、中学校への学校訪問、中学校進路説明会への参加などが主要業務に過ぎなかった。

しかし、企業でいうところの「顧客」（学校では「生徒」）に本校について深く知ってもらい、関心を持ってもらうことこそが、「広報」の要であり、本来の趣旨である。

そのため、これまでは単に「今あるものを広報すること」に主眼を置いていた業務を、「新たな魅力を企画し、広報して、仲間を増やすこと」に重点を置く方向にシフトし、名称も改めることにした。

（イ）様々なチャネルを活用したPR活動

令和4年度末に北九州市立高等学校学則を改正し、令和5年度から新学科「未来共創科」に係る対外的な説明を開始した。本校の学科再編の背景、時代や社会の要請に応じて「学び」の概念や生徒が身に付けるべき資質・能力が変化していることのみならず、大学入試改革の状況などの情報も交えながら、様々なチャネルを活用してステークホルダー（中学校、中学生、保護者等）に対してアピールした。

これまでは「とりあえず情報を撒く。反応があれば対応する。」といった消極的な広報活動に留まっていたが、教職員が積極的にPR活動に関わってくれた。

対外的なPRに当たり、教職員自身がそもそもこの学科再編を行う必要性は何か、な

ぜ学びを変化させなくてはならないのか、本校の特色や魅力とは何かについて改めて考える貴重な機会にもなった。

時期	場面・場所等	備考
令和5年2月	校長会長会議（オンライン）	新学科のPR
5月	中学校長会議（オンライン）	新学科のPR
	市立中学校全校訪問（第1回目）	教職員による新学科のPR
	八幡東イオンモールにてPR動画配信（5月～令和6年3月まで）	
6月	市立中学校全校訪問（第2回目）	パンフレット配付・説明 ※市外の中学校にも訪問
	中学校教頭会議（オンライン）	新学科のPR
8月	教育委員会発行の情報誌 「未来をひらく」	新学科のPR
	「シン・イチリツ」PR動画の 製作・配信開始	
	保護者向け説明会 「ナイトスクール」	初の保護者向け説明会（夜間に実施）。約200名が参加。
9月	第1回中学生学校見学会	約600名が参加（保護者約250名を含む。）。
10月	第2回中学生学校見学会	約300名が参加（保護者約110名を含む。）。
	塾での新学科PR	オンライン
11月	入試要項配付（特色化選抜、Web出願など）	全市立中学校
【その他】 ・中学校の要望に応じて中学生向け高校説明会に参加（随時実施。令和6年3月末時点でのべ72校で実施済み。）		

（ウ）これまでにない学校案内（パンフレット）にチャレンジ

「普通科から『未来共創科』に学科再編すると同時に、新たな学校を創るくらいの気持ちでやろう」とのコンセプトの下で学校案内（パンフレット）の検討を進めたが、事業企画室の教職員の間で「新たなものにチャレンジしたい」という気持ちの変化が生まれてきた。

新しいものを作るとなれば、一定の労力を要することになるが、新たなものを創る（生み出す）ことにチャレンジしたいという、従来とは異なるポジティブな雰囲気が教職員間に芽生えてきたのは管理職にとっても嬉しい驚きであった。

令和4年度 学校案内



令和5年度 学校案内



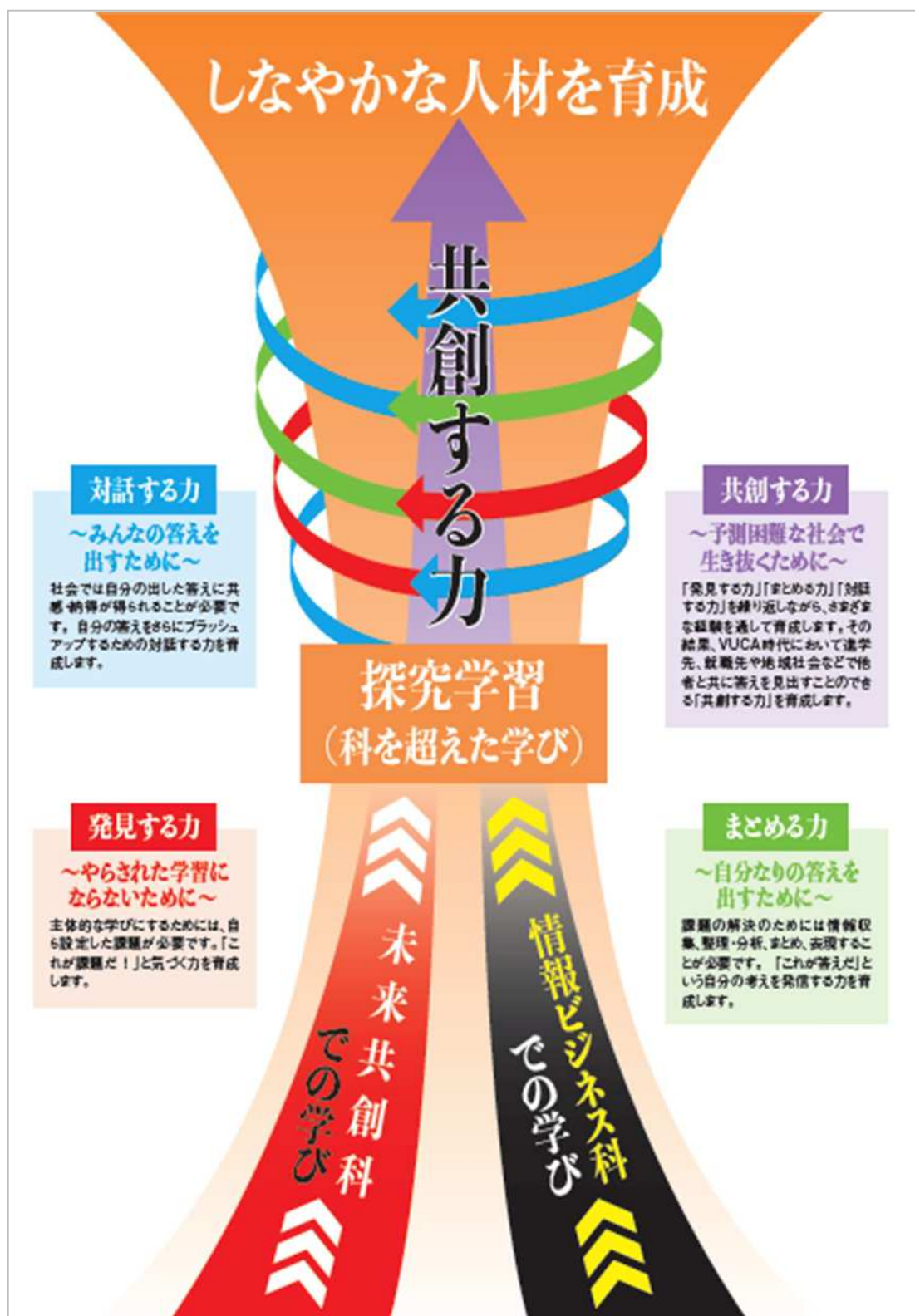
令和6年度 学校案内



その結果、上図のように、従来の学校案内とは全く異なる、独創的かつ現代的なテイストに変化したり、左から開くと「未来共創科（前普通科）」の内容が、右から開くと「情報ビジネス科」の内容が始まるという、これまでにはないパンフレットの構成に変わったりした。

編集の過程において教職員間でよく聞こえていたのは、「こうしたら面白いんじゃない？」など、これまでに聞くことがほとんどなかった、チャレンジすることの楽しさを表すポジティブな言葉であった。

また、「本校でどのような学びを行っていくのかについても積極的に発信したいよね」などの声も上がり、本校の学びのイメージ作りにも教職員が熱心に取り組み、以下のような学びの概念図を作成してくれた（以下の図は、学校案内からの一部抜粋）。



(エ) 新しい学校をコンセプトに、新たなロゴづくりにチャレンジ

事業企画室が中心になって、新しい学校のイメージアップと若い世代にも響く新たな学校ロゴを作ってみたいとの意欲が教職員間で高まり、自由な発想の下で新たな学校ロゴが完成した。

これらのロゴをイベントなどでも活用することで、「厳しくて固い昭和の学校」という本校のイメージからの脱却にも役立てることができた。

令和4年度までの学校ロゴ



●令和5年度に新たに追加した学校ロゴ

(シン・イチリツの「シン」(新)を、かつての流行語「おニュー」にかけたもの)



●多様性をイメージした学校ロゴを更に追加



このロゴの作成に当たっても、業者にデザインを依頼したわけではなく、教職員が半ば面白がって、ワクワクしながら作成していたのが印象的である。

このロゴが完成したことにより、思わぬ波及効果が生まれ、「教職員ポロシャツを作

ってみよう！」という想定外のチャレンジにもつながった。

(オ) 教職員ポロシャツづくりにチャレンジ



1学期の終業式の日管理職が着用し、新しい学校づくりというコンセプトとともに、学校長が生徒に紹介した。

教職員が着用することで、生徒にも「新たなことにチャレンジしている学校に在籍している」という感覚が芽生え、そこから「自分たちも何かにチャレンジしたい。」と思っ
てほしいと考えていたところ、生徒自身から「9月の体育祭用に自分たちもTシャツ
を作りたい。」との声が上がってきた。

これまでは、「自分たちの希望を言ってもどうせ無理」といった消極的な姿勢が多か
った生徒たちであったが、大人が面白がってこれまでになかった取組を実践している姿
や、大人が楽しんで学校改革に取り組んでいる様子を日常的に目にするによって、
「私たちもこんなことをしてみたい。」といった提案や発言が生徒たちの間で少しずつ
増えてきたのは嬉しい変化であった。

(カ) 生徒による体育祭Tシャツづくりにチャレンジ

しかし、体育祭Tシャツを作ると言っても、当然のことながら一人当たりの費用負担
が発生するわけで、全員が体育祭Tシャツを作成・購入することは決して低いハ
ードルではない。

そこで、生徒は「不可能を可能にするにはどうしたらよいか。自分たちでできること
はないか。」と、他校の事例などを調べたりしていた。その結果、PTAにコンセプト
をプレゼンテーションすることによって理解を得て、購入の支援をしてもらえないかと
考え、PTAに自ら申し出を行い、Tシャツの作成・購入に係る支援の依頼にチャレン
ジすることとなった。

生徒たちが主体的に考え、互いに協力し合いながら、なぜTシャツを作りたいのか、
Tシャツを作ることでどのような効果につながるのか、デザインはどのように決めるの
かなどをまとめた企画書を作成した（以下参照）。

『体育祭ブロックTシャツ』企画書
令和5年7月24日

1. 企画の背景

現状分析から見えた課題・問題点

- ① ハチマキだけではチーム分けの色が分かりにくい
- ② 1, 2年生と3年生で体強さが違う
- ③ 先生はハチマキを着用しない

ブロックカラーのアイテムを取り入れる
(買う) 人が多数派

改善や解決のアイデア企画の必要性

- ① チームが分かりやすい
- ② 一体感や団結力が生まれる
- ③ 先生もTシャツを着ることでブロックカラーのアイテムを取り入れる(買う) 必要がない

➡

行事でTシャツを着用している高等学校(北九州市内)

- ・九州国際大付高等学校 ・東筑紫学園高等学校 ・慶成高等学校
- ・西南女子学院高等学校 ・北筑高等学校 ・八幡中央高等学校
- ・八幡高等学校 ・八幡工業高等学校

2. 企画の詳細内容

目的

- ・市立の寛化に応じた生徒が作る新しい試み
- ・クラスやブロック、学年の団結力を深める

内容

○Tシャツを費用する人
全校生徒 先生

○Tシャツの金額について

Aサイト	1700 円/枚～1750 円/枚 (送料無料)
Bサイト	1260 円～1287 円 (送料無料)
Cサイト	1100 円～1150 円 (送料込み)
D社	1000 円～1100 円

○Tシャツのデザインについて

前面 各ブロックの3年生に15 cm×15 cm以内でクラスまたは学年が入る
デザインを考えてもらう

背面 生徒会が30 cm×42 cm以内で体育祭スローガンを入れたもの考える

○Tシャツの色について

1組：黄色 2組：黄緑 3組：水色 4組：紫 5組：黒紺 先生：白

3. アンケート結果

ブロックTシャツについてどう思いますか

意見	割合
賛成	78%
反対	1%
未回答	21%

生徒からの意見

賛成意見

- ・世間一般にダサイと買われないようなデザインならいいと思います
- ・あったほうがテンションが上がるから、ブロックごとに頑張ろうという気持ちを強く表すことができると思うから。
- ・汗のじみが目立ちにくいものがいいです
- ・自分たちのクラスごとにデザインを考えたい
- ・サイズを選択できるようにしてほしい

反対意見

- ・お金がかかって自分たちで払わないといけないなら嫌です

P T Aへの説明の前に、教職員へのプレゼンを行った。その後、P T A役員へのプレゼンを経て、Tシャツの作成・購入費用の支援について了承が得られたため、体育祭のTシャツを作成することが決定した。



(かつての体育祭の様子)



(令和5年度：体育祭Tシャツを着て、校歌を歌う生徒たち)

● Tシャツは全5色、学年を縦割りして、3年生が中心となってオリジナルロゴを作成。



かつての体育祭では、全員が同じ体操服を着用しており、誰がどのチームなのかがわかりにくいなど、「個性」や「オリジナリティ」があまり感じられなかったが、令和5年度の体育祭ではチームごとの団結力や一体感がこれまで以上に高まったように感じる。

色合いやデザインを生徒が主体的に考えて製作し、そのTシャツを保護者や地域の人たちの前で披露できたことの喜びや、大きなプロジェクトを達成することができた自分たちを誇らしく感じているようでもあった。

「大人が決めたことを、何も言わずに、ただ守る」のではなく、「自分たちの思いを言語化して、大人や周囲に働きかけて、変えていく」ことの喜びを味わった生徒たちの表情が一樣に明るかったことが印象的であった。

一部の保護者からは、「このような取組にPTA会費が生きていることがうれしい。」

「大変よい試みで感動した。」「私も欲しくなった。」などの声も寄せられた。

(キ) プロモーションビデオ「学校の色を決めるのはキミだ！」製作にチャレンジ

新しい学校づくりのスローガンの下、「学校ロゴづくり」「教職員ポロシャツづくり」、さらには「生徒による体育祭Tシャツづくり」など、校内で次々にチャレンジの連鎖が起き始めている。

次のチャレンジとして、教職員から上がってきたのは、「新しく生まれ変わる学校『シン・イチリツ』のイメージを対外的に発信したい。」「動画を作って発信するのはどうか。」との声であった。

この動画づくりに当たり、教職員だけが携わるのではなく、学校の雰囲気を感じてもらうためにも実際の生徒が出演してはどうかとの話が持ち上がり、教職員と生徒の有志が対話・協議して、本校が目指す教育理念などをイメージ化して発信することが決定した。

教職員がストーリーを考え、絵コンテを作成した。また、動画撮影するための場所選びに当たっては、教育委員会や市役所にも相談して決定した。

決して低くはないハードルがいくつもあったが、「プロモーションビデオを作成して、中学生や保護者、中学校教員にどのような学校にしたいのかを伝えたい！」との強い思いで乗り越え、8月にプロモーションビデオが完成し、2学期の始業式で、全校生徒に披露できた。

(体育館で全校生徒に披露する様子)



(出演してくれた生徒たち。前列右は本校校長。)



【プロモーションビデオ URL】 <https://youtu.be/UvORD4lmutE?feature=shared>

(ク) 保護者向けの説明会「歓迎！ナイトスクール」開催にチャレンジ

令和6年度から「普通科」が新学科「未来共創科」に再編されるに当たり、教職員から「保護者に対して学校のコンセプトや新学科が目指す方向性などをきちんと説明したい。」との声が上がってきた。保護者に向けて、何を、どのように伝えるべきかについて、新学科をけん引する普通科主任と「事業企画室」が中心となり、内容を検討した。

保護者向けの説明会「歓迎！ナイトスクール」でチャレンジしたこと

- ① 本校が目指す学び、「生徒の『やりたい』が実現できる学び」「年齢や分野の異なる人が協働し、課題解決を目指す体験型の学び」の必要性を伝えたい。
- ② ①がイメージできるようなワークショップを導入し、保護者にも体感してほしい。
- ③ 当日、保護者に質問を自由にしていただき、我々が目指している学びをより多くの方に知ってもらいたい。

①：学びの必要性

大人が子どもだった時分に比べて社会全体が大きく変化していること、大人が経験してきた同質性・均質性の高い学校教育から今は「学びの概念」が大きく変わっていることなどを保護者自身が深く理解して、腹落ちするような説明会にしなければならないとの認識で一致していた。

しかし、単に資料を配付して、「主体的・対話的で、深い学びが求められている。」「国の高校改革の流れも踏まえて、これから市高は変わっていくので期待してほしい。」などと本校の教職員が声高に叫んだとしても、果たしてその趣旨が保護者にきちんと伝わるのかとの懸念があった。

また、『普通科』という、大人が慣れ親しんできた学科の冠がつかない新学科を選択した場合に、後々の大学入試で不利になったり、子どもの進路に何らかの影響が出たりすることはないのか。」など、保護者や中学生が不安に思っていることなども耳にしていたので、学校としても適切に説明できるようにしておかなければならないとも認識していた。

そのためには、「出口」である大学入試にフィーチャーした情報もしっかりと保護者にお知らせする必要がある。つまり、大学入試においても、「知識・技能」のみならず、「思考力・判断力・表現力」を重視する出題形式に変わってきており、本校での学びによってそれらの力が身につけられること、これからの大学入試でも大いに役立つ学びを提供していくことを保護者と中学生に伝え、理解を促進しなければならない。

そこで、本校のカリキュラム等CNでもある北九州市立大学地域創生学群准教授の廣川祐司先生に本校の趣旨を伝え、相談したところ、「変化する『学力』の考え方と『大学入試』について」と題した講話を実施していただくことができた。

参加した保護者からは「大学のことがよくわかった」との感想や、「私たちの大学受験のときとこれほど大きく変わっているとは全く知らなかった。このように変わっているから、高校での学びを変えていくということなんですね。」という声もいただき、本校の目指す方向性に対する安心感なども高めることができたと感じた。また、保護者自身が昨今の教育分野における変化について詳しく学ぶ機会にもなったように思う。

②：学びのイメージの体感

本校での学びについて説明する際に、単に言葉で見聞きするのではなく、実際の学びのイメージ、特に協働的な学びのイメージを保護者の方に体感していただくことも

重要ではないかとの意見が教職員から出てきた。そのため、当日は、説明会の途中で4名の保護者グループが作りやすくなるよう、着席する場所を計画的に指定する工夫も凝らした。

ただし、その4名は、当然知らない人同士であるので、アイスブレイク活動を最初に行行って、互いに言葉を交わして場が温まった段階で、グループで話し合いながら協働して問いに答える形式のワークを取り入れることにした。

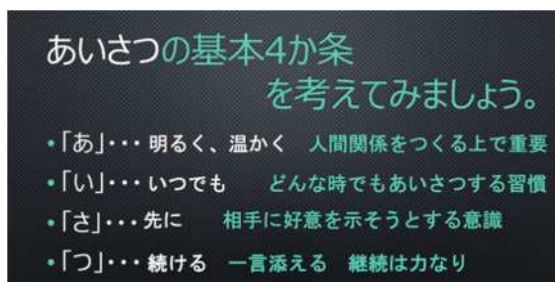
アイスブレイクでは、「あなたの『推し』について教えてください。」をお題目に設定し、自己紹介も兼ねて互いの興味関心について語り合う機会を設定した。



会場に来ていた保護者は、「説明を聞きに来ただけなのに、隣近所の人と話をしないとイケないの？」といった感じで、最初はかなり困惑しており、少し遠慮がちな進み具合であった。

教職員が、「皆さん、お子さんたちは学校でこういう話し合い活動を日常的にしているんですよ。大人の私たちも当然できますよね？」などと声をかけると笑いが起こり、1名、2名と自分の「推し」について話し始めた。

すると、会場のあちこちから笑い声や共感する声が聞こえてくるようになり、一人の発言に対して質問を繰り返して深く話し合うグループや、終了の合図の後もずっと話しているグループも出てきたりして、大いに盛り上がったアクティビティとなった。ほんの10分程度の活動であったが、温かい雰囲気が会場全体に波紋のように広がっていったのが大変印象的であった。



その後、「あいさつの基本4か条を考えてみましょう。」というお題目で、問いに対する答えを互いに対話して導き出すワークを行った。

アイスブレイクでグループの仲が温まっていたことから、最初のスタートから話し合いが円滑に進み、「答え、絶対そ

れですよね！」といった喜びの声だったり、「それはないだろう（笑）」など、面白い回答への笑い声が響いたりして、会場全体が賑やかで、大いに盛り上がった。

参加した保護者の感想には、「よくある説明会ではなく、保護者同士がコミュニケーションする時間もあって楽しかった」「子どもには、こういう場で学んでほしい」などの感想をいただくことができた。

③ 保護者の方からの質問を自由にいただくために

大きな会場であればあるほど、質問は遠慮がちになる。そのため、参加者が質問をスマートフォンから直接入力でき、できるだけタイムリーに答えられるように工夫した。

いただいた質問はプロジェクターに表示し、順次回答していった。最後の質問まで行き届かなかったが、閉会後にも、スタッフが会場に残り、個別に質問を受け付け、できるだけ不明な点を残さないでいいように対応した。

（保護者向けの説明会「ナイトスクール」の様子）



校長による説明



普通科主任による説明



北九州市立大学・廣川准教授による講話

※「歓迎！ナイトスクール」での資料及びアンケート結果は参考資料1・2のとおり。

（2）外部と一緒に考える・取り組む

ア 文科省事業における実施体制（教育委員会・本校）

本事業については、指導企画課が担当しており、課長及び係長が各1名、指導主事2名、職員1名の計5名で関係事務を総括している（前年度から2名増）。

指導主事のうち、1名は本校の教頭職であり、本校と管理機関とのパイプ役であるとともに、令和5年4月から民間人校長として就任した増田順校長先生を支援する役割も担っている。

管理機関は、定期的に本校を訪問し、生徒の様子や教育活動の視察などを行っている。また、本校の管理職と教育長との協議の場を適宜設けて、委員会全体での情報共有にも努めている。

令和5年度については、事務局予算（「北九州市立高等学校の魅力向上事業」）として5,390千円を計上し、事業の円滑な実施に努めた。

平成4年度に本校の管理職、教務主任、主任等で構成される「市高魅力化検討委員会」を立ち上げ、新学科の在り方について検討を行っている。

メンバーの選定に当たっては、探究的な取組に積極的に取り組んでいる教職員を中心に、普通科と情報ビジネス科の両方から選定している。双方の科から選定しているのは、時代に対応した新しい学びを新学科のみで実施するのではなく、すべての学科で実施して本校全体を底上げする、すなわち「シン・イチリツ」としての強い意思を体现することを意図したものである。

これとは別に、「カリキュラム検討委員会」も校内に設置している。校長、副校長、教頭、教職員3名、カリキュラム等CN及び大学生が定期的に集まり、令和6年度からのカリキュラムの検討を行っている。

なお、検討したカリキュラム案については、令和5年度から試行実施しながらブラッシュアップしながら令和6年度からの新学科の設置に備えている。

イ コーディネーターの配置及び活用内容

令和5年度は、3名のコーディネーター（以下「CN」という。）を配置した（前年度と同様に、必要なときに活用する「単発型」での配置）。内訳は、「カリキュラム等CN」「広報魅力化CN」「探究学習支援CN」が各1名である。

「カリキュラム等CN」には、前年度に引き続き、北九州市立大学地域創生学群の廣川祐司准教授にご就任いただいた。廣川CNは、北九州市立大学で入試広報センター委員及び大学全体の教育改革推進室委員を務めている。また、高大連携事業や高大接続に係る取組をゼミ活動として行い、近隣の高校と連携した「地域課題解決型学習」の実践を行っている。大学入試改革の動きに関する情報把握や大学との連携・協働体制を充実させる必要があるため、適任と判断してご就任いただいている。

令和5年度からは、インターンシップ生として、廣川ゼミの学生1名が週3回ほど来校し、本校での探究学習の支援や生徒のグループ活動の補佐などを担ってくれている。「年齢が近い大学生」「よいロールモデル」と日常的に交流する機会があることで、高校生にとっても刺激となり、また進路や学習上の悩みごとなどのよき相談相手にもなっている。

また、フィールドワークをするときなどには、インターンシップ生が仲間の大学生に声をかけてサポート要員を確保してくれるなど、高校生が多様な人材と交流する機会の拡充にもつながっており、大変よいサイクルが生まれている。

「広報魅力化CN」には、前年度と同様に、YK STORES株式会社 代表取締役 吉田一直氏にご就任いただいた。吉田氏は、市役所や市内の大学とコラボレーションした動画制作、商品開発などに数多く携わっており、市内の複数法人のPRアドバイザーにも就任しておられることから、広報部門のCNとして、本校の魅力発信に係る技術的な助言等をお願いした。

令和6年度の生徒募集ポスターのレイアウトや色調、デザインなどについても相談して、これまでにない斬新な広報につなげることができた。

「探究学習支援CN」には、西南女学院大学の非常勤講師である大庭正美氏にご就任いただいた。大庭CNは、北九州市教育委員会の元・指導部長であり、小学校の総合的な学習の時間や特別活動の分野で多大な功績を残している。

「探究」は、総合的な探究の時間や新しい学校設定教科の中だけで実施すればよいものではなく、日々の授業において教科横断的に実施されるべきである。そのため、大庭CNには授業を視察していただき、質問の仕方、声かけのポイント、話し合い活動の留意点などについてご助言いただいた。令和5年度については日時の調整が難しく、数回程度の実施に留まったが、次年度は継続的に授業を見ていただくことを予定している。

ウ 市高魅力化コンソーシアム

コンソーシアムについては、前年度からの議論を引き続き行うため、構成員に大きな変更はないが、大学生と地域をつなぐコミュニティの場づくりなどに尽力しておられる20代の若い構成員にも入っていただいた（中治・肥田構成員）。

前年度までは、オブザーバーとして、カリキュラム等CNには参加いただいていたが、令和5年度は3人のCN全員にもお声かけして、ご参加いただいた。

コンソーシアムは、7・8月・11月・1月に開催した（計4回）。初回は、一連の報告事項の後、アイスブレイクを兼ねたワークショップを行い、新たに導入する探究的な学び「イチリツ・プロジェクト」に対する期待や意見、提案などを自由に議論いただいた。

スクール・ポリシーに関しては、立派なことを書いて飾っておくだけでは意味がなく、一つ一つの教育活動や生徒との接点の中でこのポリシーが生かせるように、教職員がチェックし合いながら、日々確認しながら進めていくようにとのご意見もあった。

2回目以降の会議では、高校入試の在り方について議論が拡がり、入試改革をドラスティックにやることで学校が変わるのは間違いないので、学力ではない特色で生徒を集める手法を検討してみることなどのご提案をいただいた。検討の結果、令和6年度の特色化選抜においては、「コミュニケーション重視型選抜」（グループワーク及びグループ面接）及び「評定重視型選抜」（グループ面接）の2パターンで定員（200名）のうち半数を選抜することになった。本校を受検する中学生が、本校のスクール・ポリシーを踏まえて表現する内容をしっかり聞くような入試制度にもしていただきたいとのご意見もいただいている。

（区分内で五十音順・敬称略）

◎：座長 ○：副座長

区分	氏名	所属
学識経験者	◎ なかお もとい 中尾 基	国立大学法人 九州工業大学 工学研究院基礎科学研究系 教授
	まなべ かずひろ 眞鍋 和博	公立大学法人 北九州市立大学 地域創生学群 教授
企業関係者	やまい たかひろ 山井 高広	日本政策金融公庫 北九州支店 国民生活事業 事業統轄
	ひらはた さとる 平畠 暁	九州電力（株）北九州支店 副支店長 兼 企画・総務部長

民間関係者	ふくいずみ あきら ○ 福 泉 亮	Nature&KOKOROZASHI アルビレオ 代表 北九州市立ユースステーション スタッフ
	なかじ こうた 中 治 航太	GZ キャピタル株式会社 北九州イノベーションセンター事業部
	ひだ ひかり 肥田 光	有限責任監査法人トーマツ ジュニアスタッフ 前・ReCITAL 株式会社 福岡支店長
行政関係者	たかまつ じゅんこ 高松 淳子	北九州市教育委員会 学校教育部長
	たまの りこ 田丸 陸子	北九州市教育委員会 学校教育部 教育振興担当課長

※議事概要は参考資料3のとおり。

エ 北九州市立高等学校の魅力向上事業にかかる運営指導委員会

運営指導委員会の委員については、前年度からの議論を引き続き円滑に行うため、前年度と同様のメンバーを選定した（中学校長会の改選に伴う委員変更のみ）。運営指導委員会には、「カリキュラム等C N」にも参加を依頼して、カリキュラムの検討状況などについても情報を共有していただいた。

運営指導委員会は、7・10・1月に開催した（計3回）。スクール・ポリシー案、カリキュラムの検討状況、新学科の周知状況、入試改革などについて協議し、本校に対する従来のイメージ（昭和の学校、部活動をしに行くための学校など）から、多様な学びに基軸を置いた学校にシフトしていく上での留意事項などについてご意見をいただいた。

（区分内で五十音順・敬称略）

◎：委員長 ○：副委員長

区分	氏名	所属
学識経験者	◎ もとかね まさひろ 元 兼 正 浩	九州大学大学院 人間環境学研究院 教授
企業関係者	ながの けい 永野 恵	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング（株） 政策研究事業本部 公共経営・地域政策部 副主任研究員
	はたの たかし 羽田野 隆士	北九州商工会議所 専務理事
民間関係者	あそう こうじ 麻生 浩二	北九州市立高等学校 PTA会長

行政関係者	○ か い こういち 甲斐 孝一	北九州市立中学校長会 組織部長 北九州市立富野中学校 校長
-------	---------------------	----------------------------------

※議事概要は参考資料４のとおり。

（３）様々な分野の方々との出会いがあふれる学校へ

ア 学校内外での大学生との活動

令和６年度から本格実施する学校設定教科「イチリツ・プロジェクト」（以下「イチプロ」という。）の一部を、令和５年度に第１学年でプレ実施した。プレ実施に当たっては、北九州市立大学地域創生学群の学生に学習支援（伴走）してもらいながら進めている。

教職員は、これまで街歩きして課題を発見するという体験をしたことがなかったが、学生は校外実習に慣れていることから、実体験に基づいて生徒にアドバイスできるよさがあり、随行の教職員が学生から学ぶことは少なくない。また、生徒と学生は年齢も近いことから、よいロールモデルでもある学生たちとの学びは、生徒にとっても大変よい刺激となっている。

令和６年度からの体験的な学びやイチプロの実施についても、大学生による学習支援を継続する予定である。

- 大学生が課題を発見するために必要な視点を説明。チェックポイントに大学生が待機し、生徒らの途中報告（課題発見の状況）を聞きながら、次の目的地に向けたアドバイスをを行った。



（チェックポイントでの様子、体操服は本校生徒、私服は大学生）

- フィールドワークで発見した課題を整理・分析する様子。大学生から方法を教えてもらったり、生徒が相談したり、大学生が学習の進捗について助言



- 体育館で、グループごとに課題をまとめ、その課題解決に向けた取組について発表している様子。大学生各発表ブースでのファシリテート。



イ 大学生インターンシップの受入れ

北九州市立大学との協議に基づき、本校に5か月間（令和5年9月～令和6年1月）、長期インターンシップ生（地域創生学群3年生）を1名受け入れた。

本校での業務として、令和6年度から導入する地域社会課題を踏まえた体験的な学び、令和6年度からの学校設定教科「イチプロ」のプレ実施に係る業務のサポートをお願いした。

長期インターンシップ生は、探究的な学びが充実していることで定評のある高校に通っていたときの学習経験、大学での実習における経験などを踏まえ、生徒が使用する

るワークシートの作成や、体験的な学習を実施する際の留意事項などを教職員にアドバイスする役割も果たしてくれた。

また、生徒たちと年齢が近いことから、教職員たちから持ち寄られるアイディアに対して「こういう視点で投げかけたほうが生徒には理解しやすいと思う。」など、若者ならではの助言などもあり、教職員にも頼りにされる存在となっていたことが印象的であった。

生徒たちにとっては、よいロールモデルたる大学生が日常的に校内にいて、学習のサポートや困りごとの相談などに応じてくれる環境が整備されたことにより、大学生活がイメージしやすくなり、また教職員との関係とは異なる「ナナメの人間関係」が身近に生まれることで、生徒が幅広いネットワークを構築して、広い視野を持つきっかけにもなった。

○ 長期インターンシップ生が作成した資料（一部抜粋）



ウ 大学との連携

(ア) 九州工業大学と連携したアントレプレナーシップ教育

九州工業大学が中心となり、アントレプレナーシップ教育を展開。講話とワークショップ（ワークショップへの参加は一部の生徒）がセットとなる学びの提供をいただいた。

アントレプレナーシップとは何か、九州工業大学特任教授から講話をいただき、実際に起業された経営者の方から、社会で必要とされるビジネス力を中心した講話、最後に北九州市立大学 国際環境工学部教授からスタートアップとは何か、新しいビジネスを始める際の着眼点についての講話をいただいた。

この3者の講話に引き続き、本校生徒数名が九州工業大学が展開するアントレプレナーシップの3日間ワークショップに参加した。

※下の写真は、3者の講義の様子



(イ) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学及び西日本工業大学との連携協定締結

本校は、令和5年9月25日付けで学校法人東筑紫学園に属する九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学と、同年9月28日付けで学校法人西日本工業学園に属する西日本工業大学との連携協定を締結した。

九州栄養福祉大学とは、従前から本校の情報ビジネス科が「食」を中心とした連携を進めており、西日本工業大学とは令和5年度からeスポーツや3D造形等に関する先端的かつ実践的な学びを協働して進めている。

これらの協定を通じて、本校の探究的な学びをさらに進展させることを目指している。



九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学



西日本工業大学

<九州栄養福祉大学の専門性を生かした学び>

北九州市若松区にある響灘菜園株式会社で年間100t以上発生し、市場に出回らない規格外野菜を活用して、レトルトの「トマトのおんがえしカレー」を製作して販売し、その収益の一部をこども食堂に寄付する活動を実施した。

九州栄養福祉大学がレシピを、西日本工業大学がパッケージデザインを考案して、情報ビジネス科の市高生がマーケティング・販売を行った。

大学・高校がそれぞれの専門性を生かし、1つの商品の開発から、パッケージング、販売までを連携し



て手掛けることができた。

今後は、これらの取組に未来共創科の生徒たちも関わるなど、それぞれのアイデアや専門性・強みが発揮できる取組を増やしていきたい。

増やす過程では、生徒が取り組みたいプロジェクトにおいて、どのような専門性を有する人や団体と共創したいのかなども考えさせながら、生徒が主体的に考えながら進められるようにしたい。

＜西日本工業大学の専門性を生かした学び＞

高等学校では、情報Ⅰの授業が必須となり、情報の科学的な見方・考え方、情報と情報技術を活用した問題解決の手法等を学び、実践に生かしていくことが求められている。

そのため、西日本工業大学に依頼して、AIを活用した取組事例やAIリテラシーに係る講話を実施いただいた。



また、教育課程外の選択授業「市高タイム」の講座の一つとして、「IT関係の探究的な学び」を設けており、生徒が西日本工業大学おぼせキャンパスに足を運び、3Dプリンタ、AIを活用したロボット、プロジェクションマッピングの仕組みや作り方などについて、大学の教授陣や学生から直接ご説明いただき、最新のテクノロジーに触れる体験的な学びにご協力いただいた。

専門的な機器類が整ったキャンパスを実際に訪問し、学生が学ぶ様子などを目にするにより、生徒たちはテクノロジーの進化や理系分野の学びへの関心を高めるとともに、高校卒業後の進路について深く考える機会にもなった。



エ 他校の生徒との交流

令和5年8月29日に、文科省事業の指定校である熊本市立必由館高等学校と広島市立美鈴が丘高等学校の生徒を本校に招き、各高校で実践しようとしている取組等について、生徒同士が意見交換する交流会を行った。

これまでの本校では、他校の生徒との交流と言えば部活動での試合程度で、生徒同士のネットワークづくり、生徒の視野を広げることなどに着目した今回のような交流イベントは実施したことがなかった。そのため、本校でそのような意欲が高まったこと自体が大変画期的なことであった。

アイスブレイク（自己紹介）から始まり、交流が深まるように4人1組で班分けし、ワークショップ形式での意見交換を行った。食堂でランチを食べながらの交流会も行った。

生徒同士の交流に当たり、教職員側から提供したのは交流の場だけである。つまり、生徒たちに特にテーマを与えたわけではなかったが、生徒が互いの学校の違いに着目し、学食での食べ物や校則、学び方の違いなどがテーマとして自然と浮かび上がることを目の当たりにした。「自分たちの校則は本当に必要なのか」「どうすれば校則を変えることができるのか」など、休憩時間の際などにも生徒同士で情報交換をしていたのが印象的だった。

こうした生徒たちの姿を目の当たりにして、生徒のみならず、教職員も交流の良さを実感し、年齢が同じでも、学ぶ環境等が異なる生徒同士が交流をする機会を次年度はもっと増やしたいと思う。

反省点としては、生徒同士の交流に注力してしまい、教職員同士が交流する機会をもっと充実させるべきであったということである。そのため、令和6年度は生徒の学びの充実につながるようなワークショップ型の教職員交流の機会を設けて、教職員のネットワークづくりにつなげていきたい。

今回の取組を通じて、生徒たちは現在もSNS等で交流を続けており、その後の校則がどのように変わったのか、意見交換により自分たちの取組がどのように変わったのかなどについて継続的に情報交換している。生徒にとって大変貴重な機会になったことから、学校としても、様々な意見や考えを持つ人たちとの出会うことができる機会を充実させていきたい。



※写真：生徒たちの交流の様子